

度が減少するのは、前述の如く、保育者に対する昔からの古い觀念から脱し得ないからではなからうか。

結 語

以上考察してきた如く、保育者に対する社会的評価が近年は、一昔前の子守りのな考え方に比較して、可成り高くなってきたようであるが、未だ充分であるとは云えない。今後保育者の社会的地位向上のために、我々が機会あることに啓蒙運動をすることが必要である。と共に、現職の保育者諸姉が更に自己研鑽

發表第 2 日 目

幼児の造形表現に於ける

一 考察

ゆかり文化幼稚園

藤 田 復 生

幼児の造形表現に於て、無意識な表現から意識的な表現に發展し、更に統一された表現へと發展する事は云うまでもない。この過程に於て、表現内容と表現形式に、多少とも意識とか、或は何等かの意味を認め得る、満四歳から五歳児を中心として、その表現を基として、幼児の生活経験が如何なる感じ方をされ、又表現に如何に表れ、更に造形表現の發展過程が如何に見られたか、又更に幼稚園

を重ねて、一般社会の人々からその真価を認められるよう努力することが大切である。保育者養成の学校では、更に質のよい保育者を世に送るよう努力せねばならぬし、園の経営者は可能な限り、保育者の待遇等もよくして、人格識見共に立派な人々が安んじて保育に携われるようにしよう。かくして保育者の質をよくし、その社会的地位を向上させることによって、保育を受ける子供達の幸福が一層増進せられるであらう。

に於ける造形教育の指導方法を如何に確立して行くかが本研究の目標である。

これを要約すると、次の四項になる。

- 一、幼児のものの観方、感じ方
 - 二、幼児の造形感覚の分類
 - 三、幼児の造形表現に於ける發展
 - 四、幼稚園に於ける造形教育指導の研究
- 一、は幼児期の生活経験領域に於ける、物、心両面に対する感じ方、観方、とらえ方について
- 二、は感じ方、表現の分類と概別である。
- 三、はこれらの分類による造形表現の發展經過の考察である。
- 四、は造形教育の立場からの、指導方法の研究である。
- 今回は發表時間の都合で、第一と第二の問題を総合して述べたいと思う。

これらの考察対照は、東京都世田谷区、砧町、成城町、祖師ヶ谷

町、及び小田急沿線地域から通園する、ゆかり文化幼稚園の、昭和二十二年より三十年に至る九年間の園児であるが、調査資料の対照となつたのは、昭和二十五年より三十年度に於ける、六年間の在園児、五六四名である。

幼児の造形的な表現は、一種の肉体的、又は精神的な満足感をもって、衝動的に活動が始められ、やがて一つの意図を持って、表現活動を行う時代に発展していく。そこに意識の統一が芽生えてくると考えられる。この統覚力による意識の統一が芽生えてくると幼児の特性として、多くの想像(イメージ)を作り出し、これが意欲を伴って、更に表現の活動となつて、明らかにされる。この想像は、普通の健康児である場合、彼等の生活環境の中に於て、あらゆる感覚を通じて、意識すると否とにかかわらず、修得した経験の集積が基盤となつて、想像が生れ、又広く発展して行くと考えられるのである。

即ち、感覚によつて得た多くの経験は、想像となり、又自由な表現となるので、この根本である感覚が訓練される機会(チャンス)は、生活経験の場であろう。

そこで、彼等の経験の型を、分けて見ると次の三つの型が考えられる。

一、直接経験型

二、間接経験型

三、直接、間接の共有経験型

そこで直接経験型とは、意識するとしなにかかわらず、自らの五感を通して、直接に経験されるもので、何等の概念的な示唆を受けない、人意的な要素を含まない、最も自然な型で経験するものである。この場合の感じ方は、極めて本能的であつたり、直感的な

感覚を示す例が多く、最も純粹であるとも考えられる。つまり、好き嫌の情が明らかに表れ、満足感や不満感が、敏感に示されるような事でも解る。この型は、知能の発育が未だ認められない乳児期から幼児期に於ては、当然多く単純ではあるが、全一的な感じ方(つまり全体が一つになつて感じる)とも考えられるが、同一感覚の持続性には乏しく断片的だ。想像も比較的単純ではあるが、個性的であつて、独創的な面もかなり見られる。表現も稚拙ではあつても、自由であり、好き勝手ではほとんど、客観性を認め得ないものが多いが、表現にむらが多く均一性に欠けている。色彩も単純であるが、個性的である。

間接経験型とは、幼児に客観性と知性が芽生えてくると、認識が幼児なりに出来るようになるので、物象に対して、幾らかずつでも造形的とか、内容的にも把握されて来ます。従つて意識する事が、一つの焦点を持ち、興味と理解欲が支配してくる。即ち、経験に意識が伴なつて、概念経験、つまり言葉や文字、絵本、絵画等の見方聞き方に興味と理解が中心となり、推理、洞察が伴う経験である。

この場合の感じ方は、前項の直感的な感覚とは異なり、その幼児のかつての経験によつて獲得した概念であるとか、知能を通して理解し認識しようとするのであつて、知覚による感じ方と考えられるのであつて、感覚も、やや空間性を持ち、やや時間的で持続が感じられ、多角的である。想像も過去の経験や知性や概念などを伴う発展を見せ、願望や推理などが加わり、非常に多面的ではあるが、鋭い獨創性は見せない。従つて表現も客観性が加わり、記憶の説明的表現や、技法にも既成概念が表われ、模倣性も見られる。色彩も多く見られる。

直接、間接の共有経験型とは、前項二つの型を、合せ持つ経験

で、生活環境にある多くの物象を、主観的に感じながら、更に過去の経験概念が、現在の自主的感覚を通して、経験しながら発展をさせるもので、常に感覚と知覚の両面を持ちながら経験を体得して行く形である。この感じ方は時には主観的な場合もあり、客観的な場合もあるが、感覚に幅があり、全一的な中にも、主観と客観の調和と、一種のまとまりが見られる。従って想像も、鋭い飛躍は見えませんが、健全な想像を描き、想像の領域は広いと云えよう。表現も、大胆に見えながらも、安定し、表現に対する抵抗も見えないが、自ずから一つの傾向を形成します。色彩も、だいたいに於て安定して居ると云えよう。

ここで幼児の造形感覚を、大別して分類すると、主観的な型と、客観的な型、共有的な型となるが、幼児全体について考えてみると、表現にも、感じ方にも、環境、その他の影響があるにせよ、本質的には、これらの三つの型が存在して居るものと考察される。

同一家庭で条件が、ほとんど同じであっても、兄弟に別々の型が示され、性格の違いが見られるものである。兄弟三人以上通園した家庭、十三軒について調査した結果、三人同一型であった例が、一例、二人同一型であった例が三例であった。又一卵性双生児の場合も、三組中、二組の双生児は、異った型を示している。

然しながら、生長発育の過程からみると、第一の型は、年少時に於て、第二、第三の型のものをも含んで居ると考察される。これは知性の発育に差があつて、知性によって影響される結果であろうと思われる。又これは、少年期を過ぎる頃迄には当然、大部分の者が影響を受けるものではあるが、本質的には何等かの形で残されて行くものと考えられる。

又私達保育担当者は、これら三つの型の相違に対して、軽々し

く、優劣、善悪を決定つける事は出来ないし、表現に於ても徒らに善悪の結論は出すべきではない。

この三つの本質的な感覚を肯定した上で、私共は、それぞれの幼児の造形教育の場で、造形の三要素である。色彩、形態、材質の面に於て、如何にして発達段階に則しながら、積極的に経験を与え、造形感覚を更に助長させ得るかが問題となってくる。

造形の教育の根本に於ても、又全般的な幼児教育に於ても、真実を把握し、その真実を愛し、自主的に自己を表現する事によって、人間形成のプロセスに於ける幼児期の教育の一部が達成させられるとすれば、真実を如何にして把握するかは、感覚と知覚による経験の集積であろう。洗練された、鋭敏な感覚と、知覚を先ず育て、美しい豊かな想像の上に、自主的表現を材ち建てさせることを目標に、造形教育が考えられなければならない。

以上、や、具体性を欠いた表現ではあるが、調査資料が複雑で多い為、統計的説明の資料の整理が間に合わなかつた事をおわびして、発表を終る。

幼児画に関する基本的研究 (二)

栄光幼稚園

日名子太郎

幼児期の絵画教育の方法論に関する基本的問題として、